

2列王記14－16章「国の拡大と急落」

1 A 上昇する二国 14

1 B 高ぶるアマツヤ 1－22

1 C 神の懲らしめ 1－14

2 C 二人の王の業績 15－22

2 B ヤロブアムの繁栄 23－29

2 A イスラエルの降下 15

1 B ウジヤによる繁栄 1－7

2 B エフー家の後 8－38

1 C クーデターの反復 8－31

2 C アッシリヤの圧迫 32－38

3 A 痛めつける者への依拠 16

1 B 軍事的に 1－9

2 B 霊的に 10－20

本文

列王記第二 14 章を開いてください。今日は 14 章から 16 章までを学びたいと思いますが、メッセージ題を付けるとすると、「国の拡大と急落」です。私たちは今、エリシャ亡き後の北イスラエル、また南ユダの国を見ていきます。イスラエルの国がこれまでになく大きくなる姿を見ます。北においてはヤロブアム、南においてはウジヤの時に、これまでなく大きな国となりました。けれども北イスラエルにおいては、その後に急速に没落していく姿を見ます。それはあたかも、星に寿命が来ると最後は膨張して巨大星になり、そして爆発してブラックホールになるように、です。これは国においても、そして個々の人生についても真実です。そしてこの時期に、数々の預言者が出現します。北イスラエルではホセアとアモスが出てきます。彼らは、豊かになったイスラエルにある不正や罪を暴き、そして霊的な飢饉が襲うことを警告しました。

1 A 上昇する二国 14

1 B 高ぶるアマツヤ 1－22

1 C 神の懲らしめ 1－14

14:1 イスラエルの王エホアハズの子ヨアシュの第二年に、ユダの王ヨアシュの子アマツヤが王となった。14:2 彼は二十五歳で王となり、エルサレムで二十九年間、王であった。彼の母の名はエホアダンといい、エルサレムの出であった。14:3 彼は主の目にかなうことを行なったが、彼の父祖、ダビデのようではなく、すべて父ヨアシュが行なったとおりを行なった。14:4 ただし、高き所は取り除かなかった。民はなおも、その高き所でいけにえをささげたり、香をたいたりしていた。

私たちは前回、七歳で王となったヨアシュの治世を読みました。彼は祭司エホヤダが活着している頃は主に従っていました。神殿の修繕を行なっていましたが、祭司が死んだ後に、シリアあるいはアラムの王ハザエルが攻めてきた時に、なんと神殿の宝物倉から金銀を取ってハザエルに与えました。最後は主に拠り頼むことをやめてしまっていました。この父から生まれたのがアマツヤです。彼も父と同じように主に従いました。けれども、ヨアシュが高き所は残しておいたように、アマツヤも残していました。これを破壊するのは、次回の学びを待たなければいけません、ヒゼキヤです。

14:5 王国が彼の手によって強くなると、彼は自分の父、王を打った家来たちを打ち殺した。14:6 しかし、その殺害者の子どもたちは殺さなかった。モーセの律法の書にしるされているところによったのである。主はこう命じておられた。「父親が子どものために殺されてはならない。子どもが父親のために殺されてはならない。人が殺されるのは、ただ、自分の罪のためにでなければならない。」

ヨアシュが暗殺されたことを覚えているでしょうか？家来に暗殺されましたが、アマツヤは彼らに裁きを行うために自分に権力が集中し、確立した後に彼らを処刑しました。けれども、彼は当時の慣習に反して、主の律法に聞き従いました。引用箇所は、申命記 24 章 16 節にあります。ここに、アマツヤが主に聞き従っている姿を見ることができます。

14:7 アマツヤは塩の谷で一万人のエドム人を打ち殺し、セラを取り、その所をヨクテルと呼んだ。今日もそうである。

エドム人がユダに反逆をしたので、アマツヤがそれを鎮圧しました。塩の谷とは死海の南に広がる地域です。塩岩になっており、真っ白くなっています。そこで一万人を殺しました。さらにエドムの都セラを取りました。セラは、今のペトラの辺りにあった町です。

14:8 そのとき、アマツヤは、エフーの子エホアハズの子、イスラエルの王ヨアシュに、使者を送って言った。「さあ、勝敗を決めようではないか。」14:9 すると、イスラエルの王ヨアシュは、ユダの王アマツヤに使者を送って言った。「レバノンのあざみが、レバノンの杉に使者を送って、『あなたの娘を私の息子の嫁にしてくれないか。』と言ったが、レバノンの野の獣が通り過ぎて、そのあざみを踏みじった。14:10 あなたは、エドムを打ちに打って、それであなたの心は高ぶっている。誇ってもよいが、自分の家にとどまっていなさい。なぜ、争いをしかけてわざわざを求め、あなたもユダも共に倒れようとするのか。」

午前礼拝で学んだとおりです。若者アマツヤは、主によって与えられた勝利によって自信過剰になり、イスラエルに戦いを挑みました。主によって恵みを受けると、その祝福があります。その祝福が神の恵みによるものであり、決して自分の願いや志によって与えられたものではありません。けれども、自分には出来ると思いい込みます。そして、いろいろなことに手を出します。神の恵みから離れて、自分自身でいろいろやりくりしていくのだと思いがちになってしまうのです。

ヨアシュの言った言葉は辛辣ですが、彼は痛みと経験からこの言葉を発しています。ハザエルによって彼は痛み付けられました。そしてエリシャの証しを目の当たりしていました。そして政治家としても、アマツヤがまだまだ未熟であることを見抜いていました。それが、レバノンの杉に対するあざみであったのです。パウロがこのことについて、次のように戒めています。「だれでも、りっぱでもない自分を何かりっぱでもあるかのように思うなら、自分を欺いているのです。おのおの自分の行ないをよく調べてみなさい。そうすれば、誇れると思ったことも、ただ自分だけの誇りで、ほかの人に対して誇れることではないでしょう。人にはおのおの、負うべき自分自身の重荷があるのです。(ガラテヤ 6:3-5)」

14:11 しかし、アマツヤが聞き入れなかったので、イスラエルの王ヨアシュは攻め上った。それで彼とユダの王アマツヤは、ユダのベテ・シメシュで対戦したが、14:12 ユダはイスラエルに打ち負かされ、おのおの自分の天幕に逃げ帰った。14:13 イスラエルの王ヨアシュは、アハズヤの子ヨアシュの子、ユダの王アマツヤを、ベテ・シメシュで捕え、エルサレムに来て、エルサレムの城壁をエフライムの門から隅の門まで、四百キュビトにわたって打ちこわした。14:14 彼は、主の宮と王宮の宝物倉にあったすべての金と銀、およびすべての器具、それに人質を取って、サマリヤに帰った。

「ベテ・シメシュ」はエルサレムとペリシテ人の地の間にある町で、神の箱を牛車によってペリシテ人がイスラエル人に戻したところでした。午前礼拝で話しましたが、私たちが触ってはならないものを弄っていると、自分の霊的な守りが取り壊されて、自分の大切な尊厳も失われます。

2 C 二人の王の業績 15 - 22

14:15 ヨアシュの行なったその他の業績、その功績、およびユダの王アマツヤと戦った戦績、それはイスラエルの王たちの年代記の書にしるされているではないか。14:16 ヨアシュは彼の先祖たちとともに眠り、イスラエルの王たちとともにサマリヤに葬られた。彼の子ヤロブアムが代わって王となった。

15 節から 21 節に、ヨアシュとアマツヤの治世のまとめが書き記されています。まずはヨアシュです。次の王はヤロブアムです。

14:17 ユダの王ヨアシュの子アマツヤは、イスラエルの王エホアハズの子ヨアシュが死んで後、なお十五年生きながらえた。14:18 アマツヤのその他の業績、それはユダの王たちの年代記の書にしるされているではないか。14:19 エルサレムで人々が彼に対して謀反を企てたとき、彼はラキシムに逃げた。しかし、彼らはラキシムまで追いかけて、そこで彼を殺した。14:20 彼らは彼を馬にのせて行った。彼はエルサレムで先祖たちとともにダビデの町に、葬られた。14:21 ユダの民はみな、当時十六歳であったアザルヤを立てて、その父アマツヤの代わりに王とした。14:22 彼は、アマツヤが先祖たちとともに眠って後、エラテを再建し、それをユダに復帰させた。

アマツヤは、父ヨアシュが辿った道と同じ道を通りました。最後は家来の謀反に遭いました。ラキシユは、ベテ・シメシュからさらに南にある町で、軍事的戦略的なところです。ここからさらに南に行けばエジプトであり、彼は難を逃れることができましたが、捕まえられ殺されました。

そして彼の子はアザルヤであり、別名がウシヤです。エラテは、今のイスラエルの南端の町エイラットであります。そこからシバなど、世界貿易ができます。エドムが反逆したけれどもアマツヤが制したので、自由にそこに行き来できるようになりました。

2 B ヤロブアムの繁栄 23 – 29

14:23 ユダの王ヨアシュの子アマツヤの第十五年に、イスラエルの王ヨアシュの子ヤロブアムが王となり、サムリヤで四十一年間、王であった。14:24 彼は主の目の前に悪を行ない、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤロブアムのすべての罪をやめなかった。14:25 彼は、レボ・ハマテからアラバの海までイスラエルの領土を回復した。それは、イスラエルの神、主が、そのしもべ、ガテ・ヘフェルの出の預言者アミタイの子ヨナを通して仰せられたことばのとおりであった。

ヤロブアム二世です。私たちがイスラエル旅行に行った時に、王国時代の遺跡として、ソロモンの時代か、アハブの時代か、あるいはヤロブアムの時代のものかという議論を耳にしました。このヤロブアムがそうでありました。彼の治世が極めて長いです、41 年でした。彼の時代にダビデとソロモンの時代にあった領土の多くの部分が回復されました。レボ・ハマテは、ガリラヤ湖から北東約 240 キロのところにある、神がモーセを通して約束された北端の町のひとつです（民数 34:8）。そして南がアラバの海、すなわち死海です。

興味深いのは、このことを預言者ヨナが前もって預言していたことです。あの、アッシリヤのニネベに行き、その滅びを宣言するように命じられた預言者です。けれども彼は、その御心に反してタルシシュ行きの船に乗り、そこから投げ出されて海の底まで行き、大魚の中で三日三晩いました。ヤロブアムの時代にはイスラエルはこれだけ隆盛を極めたのですが、その後すぐにアッシリヤがイスラエルを攻めてきます。

先ほども話しましたが、この時代に北イスラエルにはアモスやホセアも出てきました。そして南ユダには、あのイザヤが出てきます。イスラエルにとって、これまでの戦いはアラム、モアブとかエドム、ペリシテという、小国との戦いでした。けれどもアッシリヤという国は、桁外れに大きくなります。小学校低学年の男の子たち数名で、横綱と綱引きするようなものです。イスラエルが本当に霊的に危機的状況だったので、主が数多くの預言者を遣わされました。

14:26 主がイスラエルの悩みが非常に激しいのを見られたからである。そこには、奴隷も自由の者もいなくなり、イスラエルを助ける者もいなかった。14:27 主はイスラエルの名を天の下から消し去ろうとは言っておられなかった。それで、ヨアシュの子ヤロブアムによって彼らを救われたのである。14:28 ヤロブアムのその他の業績、彼の行なったすべての事、および彼が戦いにあげた功績、すなわち、かつてユダのものであったダマスゴとハマテをイスラエルに取り戻した事、それはイスラエルの王たちの年代記の書にしるされているではない

か。14:29 ヤロブアムは、彼の先祖たち、イスラエルの王たちとともに眠り、その子ゼカリヤが代わって王となった。

イスラエルが大きくなったのは、ヤロブアムが主に立ち返ったからではありませんでした。ヤロブアム二世は、ヤロブアム一世の立てた金の子牛を相変わらず拝んでいました。それにもかかわらず多くの土地を主が与えられたのは、一方的な主の憐れみに拠ります。ヨアシュの時に主は同じことを考えられて、イスラエルを見捨てることはなかった、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を思い起こして見捨てられなかった、とありました。

ダマスコとハマテがユダのものであった、とありますが、それはダビデとソロモン時代に遡ります。そしてそこはアラムの地であるのになぜヤロブアムがそこを取り戻せたかと言いますと、アッシリヤの王がアラムを攻めて、アラムが弱体化していたからだと考えられます。ヤロブアムの父ヨアシュの時に、おそらくは「主が与えられたひとりの救い手（13:5 参照）」というのは、アッシリヤ王だと考えられます。

2 A イスラエルの降下 15

ヤロブアム二世の長い治世と同じように、ユダにも半世紀も王を務めた人が出てきます、ウジヤです。

1 B ウジヤによる繁栄 1 - 7

15:1 イスラエルの王ヤロブアムの第二十七年に、ユダの王アマツヤの子アザルヤが王となった。15:2 彼は十六歳で王となり、エルサレムで五十二年間、王であった。彼の母の名はエコルヤといい、エルサレムの出であった。15:3 彼はすべて父アマツヤが行なったとおりに、主の目にかなうことを行なった。15:4 ただし、高き所は取り除かなかった。民はなおも、その高き所でいけにえをささげたり、香をたいたりしていた。

アザルヤとありますが、後に彼がウジヤであることがわかります。列王記における彼の記録はとても短いですが、歴代誌第二においてウジヤがとつともなく偉大な、力ある指導者であることがわかります。「彼が主を求めていた間、神は彼を栄えさせた。（2歴代 26:5）」とあります。ペリシテ人を打ち、アモン人は貢物を収め、影響力はエジプトの入り口にまで及び、そして土地を大切にしました。農業が好きだったようです。そして軍備を固め、優秀な精鋭部隊を持ち、城壁ややぐらも強固にしました。

しかしこのように強くなったウジヤの時代に、北イスラエルではホセアとアモス、南ユダではイザヤが預言を始めます。この三人の預言書の始めは、すべてウジヤの時代に与えられた主の言葉であるとあります。私たちがユダヤ人だと考えてください。霊的にも主を求める指導者で、国としても力を付けている優秀な王です。この人に何の不足があるのでしょうか？しかし、神は不足があったのです。外側では良く見えていても、内側が汚れていました。城壁は強固にしても、人々の心の内の城壁は崩れ始めていました。

15:5 主が王を打たれたので、彼は死ぬ日までらい病に冒され、隔離された家に住んだ。王の子ヨタムが宮殿を管理し、この国の人々をさばっていた。15:6 アザルヤのその他の業績、彼の行なったすべての事、

それはユダの王たちの年代記の書にしるされているではないか。15:7 アザルヤが彼の先祖たちとともに眠ったとき、人々は彼をダビデの町に先祖たちといっしょに葬った。彼の子ヨタムが代わって王となった。

ウジヤは大いなる成功を収め、そのために高ぶって、神の宮で祭司にしかできない香を炊こうとしました。それでらい病に打たれました。このことは歴代誌のほうに書いてあります。それで彼はまだ生きていましたが、息子のヨタムが王政を務めるようになります。

ユダの歴代の王の特徴は、「最後に高ぶる」ということがあると思います。昔はアサ王がそうでした。そしてアマツヤの父ヨアシムもそうでしたし、アマツヤ、そしてウジヤもそうでした。ヒゼキヤでさえ、高ぶってしまったことが歴代誌のほうには書いてあります。北イスラエルにおいては、初めから悪を行ないそれゆえ懲らしめられ、また憐れみも受けていますが、ユダは正しく生きる人が多かったのです。

いやむしろ、正しく生きたからこそおかしくなった、とも言えます。午前礼拝で学びましたが、神の前でへりくだり、主の命令に聞き従うということによって生きるのではなく、いつの間にかそれが自分の義、自分の正しさとなっていくのです。それで異なる意見や、忠告や助言を聞けなくなり、いつしか自分の心は主ではなく偶像になってしまっています。

2 B エフー家の後 8 - 3 8

王の記録は北イスラエルに戻ります。ヤロブアム二世の後のイスラエルは、急降下を辿ります。

1 C クーデターの反復 8 - 3 1

15:8 ユダの王アザルヤの第三十八年に、ヤロブアムの子ゼカリヤがサマリヤでイスラエルの王となり、六か月間、王であった。15:9 彼は先祖たちがしたように、主の目の前に悪を行ない、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤロブアムの罪を離れなかった。15:10 ヤベシュの子シャルムは、彼に対して謀反を企て、民の前で彼を打ち、彼を殺して、彼に代わって王となった。15:11 ゼカリヤのその他の業績は、イスラエルの王たちの年代記の書にまさしくしるされている。15:12 主がかつてエフーに告げて仰せられたことばは、「あなたの子孫は四代までイスラエルの王座に着く。」ということであったが、はたして、そのとおりになった。

まず、ヤロブアムの治世によってエフー家四代が終わりました。主が、バアルの撲滅をエフーが行ったので、彼がたとえヤロブアムの罪をやめなくても四代までの繁栄を約束されました。五代目のゼカリヤは、たった六か月でシャルムによるクーデターで死に絶えます。

15:13 ユダの王ウジヤの第三十九年に、ヤベシュの子シャルムが王となり、サマリヤで一か月間、王であった。15:14 ガディの子メナヘムは、ティルツァから上ってサマリヤに至り、ヤベシュの子シャルムをサマリヤで打ち、彼を殺して、彼に代わって王となった。15:15 シャルムのその他の業績、彼の企てた謀反は、イスラエルの王たちの年代記の書にまさしくしるされている。15:16 そのとき、メナヘムはティルツァから出て行って、ティ

フサフ、その住民、その地境を打ち破った。彼らが城門を開かなかったのを打ち、その中のすべての妊婦たちを切り裂いた。

ゼカリヤを殺したシャルムは、たった一か月で今度は自分自身が同じ運命に遭います。メナヘムが、かつてのイスラエルの首都であったティルツァから来て彼を殺しました。さらに彼は、ティフサフの町で残虐行為を働きましたが、これは彼に逆らうものはこのようになるのだという見せしめであったように思われます。

ヤロブアムの治世において、あれだけ栄えていましたが、その安定に胡坐をかき、主との関係をないがしろにしていると、ヤロブアムがいなくなれば、このような混乱と秩序の乱れが一気に始まるのです。私たちは平穏で、表向き大きな問題が起こっていないから、それで由としていたら、環境が少し変わった時に大きく崩れてしまう、ということです。

15:17 ユダの王アザルヤの第三十九年に、ガディの子メナヘムがイスラエルの王となり、サマリヤで十年間、王であった。15:18 彼は主の目の前に悪を行ない、一生、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤロブアムの罪から離れなかった。15:19 アッシリヤの王プルがこの国に来たとき、メナヘムは銀一千タラントをプルに与えた。それは、プルの援助によって、王国を強くするためであった。15:20 メナヘムは、イスラエルのすべての有力な資産家にそれぞれ銀五十シケルを供出させ、これをアッシリヤの王に与えたので、アッシリヤの王は引き返して行き、この国にとどまらなかった。15:21 メナヘムのその他の業績、彼の行なったすべての事、それはイスラエルの王たちの年代記の書に記されているのではないか。15:22 メナヘムは彼の先祖たちとともに眠り、その子ペカフヤが代わって王となった。

メナヘムの治世において、初めてアッシリヤの力に屈するようになりました。アッシリヤの王はプルとありますが、彼はティグラテ・ピレセル三世と同じです。歴史書の中で、また遺跡において、彼によってアッシリヤが前代未聞の拡大によって帝国となっていたことが分かります。そしてメナヘムは、アッシリヤに貢物を納めます。かなりの重税です、銀でだいたい 37 トンです。金持ちから集めました。

イスラエルの王は、ヤロブアムの治世であれだけ栄えたのは、もっぱら神の憐れみであることを知らず、そして認めませんでした。それゆえに、神は彼らを敵の手に委ねるしかなくなったのです。次のことばを思い出します。「それとも、神の慈愛があなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と忍耐と寛容とを軽んじているのですか。ところが、あなたは、かたくなさと悔い改めない心のゆえに、御怒りの日、すなわち、神の正しいさばきの現われる日の御怒りを自分のために積み上げているのです。（ローマ 2:4-5）」

15:23 ユダの王アザルヤの第五十年に、メナヘムの子ペカフヤがサマリヤでイスラエルの王となり、二年間、王であった。15:24 彼は主の目の前に悪を行ない、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤロブアムの罪を離れなかった。15:25 彼の侍従、レマルヤの子ペカは、彼に対して謀反を企て、サマリヤの王宮の高殿で、ペカフヤとアルゴブとアルエとを打ち殺した。ペカには五十人のギルアデ人が加わっていた。ペカは彼を殺し、

彼に代わって王となった。15:26 ペカフヤのその他の業績、彼の行なったすべての事は、イスラエルの王たちの年代記の書にまさしくしるされている。

ペカは、ギルアデにおいて自分の支持を得ていたようです。ペカフヤを打つときにギルアデ人が加わっていました。

15:27 ユダの王アザルヤの第五十二年に、レマルヤの子ペカがサマリヤでイスラエルの王となり、二十年間、王であった。15:28 彼は主の目の前に悪を行ない、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤロブアムの罪を離れなかった。15:29 イスラエルの王ペカの時代に、アッシリヤの王ティグラテ・ピレセルが来て、イオン、アベル・ベテ・マアカ、ヤノアハ、ケデシュ、ハツォル、ギルアデ、ガリラヤ、ナフタリの全土を占領し、その住民をアッシリヤへ捕え移した。15:30 そのとき、エラの子ホセアは、レマルヤの子ペカに対して謀反を企て、彼を打って、彼を殺し、ウジヤの子ヨタムの第二十年に、彼に代わって王となった。15:31 ペカのその他の業績、彼の行なったすべての事は、イスラエルの王たちの年代記の書にまさしくしるされている。

ついに、アッシリヤによる捕囚が始まりました。これまで、アッシリヤに隣接するシリアあるいはアラムが戦っていましたが、もう勝つ見込みがないことが分かり、それで北イスラエルのペカと組んでアッシリヤに対抗しようとなりました。ところが、それがかえって仇となり、アッシリヤはアラムを倒し、また北イスラエルをも倒しました。かつてはヨルダン川の東岸をアラムに奪われたことがありましたが、ガリラヤ地方までも取られています。アッシリヤが攻めてきたのは紀元前 734 年から 732 年までの間で、第一次アッシリヤ捕囚は 733 年に起こったと言われています。

2 C アッシリヤの圧迫 32 - 38

15:32 イスラエルの王レマルヤの子ペカの第二年に、ユダの王ウジヤの子ヨタムが王となった。15:33 彼は二十五歳で王となり、エルサレムで十六年間、王であった。彼の母の名はエルシャといい、ツアドクの娘であった。15:34 彼は、すべて父ウジヤが行なったとおり、主の目にかなうことを行なった。15:35 ただし、高き所は取り除かなかつた。民はなおも高き所でいけにえをささげたり、香をたいたりしていた。彼は主の宮の上の門を建てた。15:36 ヨタムの行なったその他の業績、それはユダの王たちの年代記の書にしるされているではないか。15:37 そのころ、主はアラムの王レツインとレマルヤの子ペカをユダに送って、これを攻め始めておられた。15:38 ヨタムは彼の先祖たちとともに眠り、先祖たちとともにその父ダビデの町に葬られた。彼の子アハズが代わって王となった。

話はユダ国に戻り、また少し時間的に遡ります。ウジヤの息子ヨタムは主の前にかなうことを行ないました。彼の業績は、主の宮の上門を建てたこと、つまり神への礼拝を民に奨励したことです。

けれども、ここで大きな危機が訪れます。アッシリヤの脅威が高まる中、イスラエルのペカと当時のアラムの王レツインとが同盟を結んで、アッシリヤに対抗しようとしたことです。これにユダが加わることの圧力をかけて

きたことです。これに対して主にあって立ち向かうのなら良かったのですが、ヨラムの子アハズは、一番頼ってはいけない人に頼ることになります。アッシリヤの国自身です。

3 A 痛めつける者への依拠 16

1 B 軍事的に 1 - 9

16:1 レマルヤの子ペカの第十七年に、ユダの王ヨラムの子アハズが王となった。16:2 アハズは二十歳で王となり、エルサレムで十六年間、王であった。彼はその父祖ダビデとは違って、彼の神、主の目にかなうことを行なわず、16:3 イスラエルの王たちの道に歩み、主がイスラエル人の前から追い払われた異邦の民の、忌みきらうべきならわしをまねて、自分の子どもに火の中をくぐらせることまでした。16:4 さらに彼は、高き所、丘の上、青々と茂ったすべての木の下で、いけにえをささげ、香をたいた。

アハズ家と血縁を結んだ王そしてイゼベルの娘アタルヤによって、背教が終わったしばらくの歴代のユダ王は、ここアハズをもって再び背教の道に戻ります。アハズの特徴は、何と言ったら良いでしょうか、「主ご自身以外の存在なら、何でも自分の不安を解消するために試した。」と言ったらよいでしょう。彼は不安でした。彼の不安は根拠があり、アッシリヤの脅威が押し寄せていました。けれども、彼は主なる神、イスラエルの神には関わりたくない、この存在以外の他のものであれば何でも試してみるが、イスラエルの神は避ける、というものでした。このような人が時々いますね、キリストについては距離を置きますが、けれども不安でいっぱい、頼りにならないほかのものに頼っています。

まず「イスラエルの王たちの道に歩み」とあります。ヤロブアムの罪を犯していた人々に倣った、ということです。けれどもアハズが行った深刻なことは次です。「主がイスラエル人の前から追い払われた異邦の民の、忌みきらうべきならわしをまね」ということです。主はえこひいきされない方です。主がカナン人を滅ぼせと命じられたのは、彼らが行っている忌まわしい行い、すなわち幼児犠牲を行っていたからです。それを再びユダヤ人自らが持ち込んだということは、モーセがかつて警告したように、イスラエル自身もその地から引き抜かれるのです。

新約時代は異なるわけではありません。パウロははっきりと、正しくない者は神の国を受け継ぐことはできないと断言しました。「あなたがたは、正しくない者は神の国を相続できないことを、知らないのですか。だまされてはいけません。不品行な者、偶像を礼拝する者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、盗む者、貪欲な者、酒に酔う者、そしる者、略奪する者はみな、神の国を相続することができません。（1コリント 6:9-10）」これらの罪によって神は世を裁かれるのに、同じことを行なっていれば世と共に裁かれるのです。

16:5 このとき、アラムの王レツインと、イスラエルの王レマルヤの子ペカが、エルサレムに戦いに上って来てアハズを包囲したが、戦いに勝つことはできなかった。

先に話したように、アラムのレツインとイスラエルのペカがアッシリヤに対抗すべく同盟を結びました。ユダがその動きに乗ってこないの、彼らは、今度はユダを攻めて、自分たちに聞き従う傀儡にしておこうと考えました。それで攻め込みます。ところが主が、イスラエルに神への恐れを抱かせて、奪ってきた捕虜などを返還させるなどさせました。詳しいことは歴代誌第二に書いてあります。

16:6 そのころ、アラムの王レツインはエラテをアラムに取り返し、ユダ人をエラテから追い払った。ところが、エドム人がエラテに来て、そこに住みついた。今日もそのままである。

ウジヤの初期の時代に確立したエラテは、アラムにとられてしまいました。けれどもアラム人がそこに住むのではなく、かえってかつて住んでいたエドム人が舞い戻ってきたのです。歴代誌にあります。アハズは自分の治世で父ウジヤの時に制していた周囲の民から、ことごとく叩かれるようになります。

16:7 アハズは使者たちをアッシリヤの王ティグラテ・ピレセルに遣わして言った。「私はあなたのしもべであり、あなたの子です。どうか上って来て、私を攻めているアラムの王とイスラエルの王の手から私を救ってください。」16:8 アハズが主の宮と王宮の宝物倉にある銀と金を取り出して、それを贈り物として、アッシリヤの王に送ったので、16:9 アッシリヤの王は彼の願いを聞き入れた。そこでアッシリヤの王はダマスコに攻め上り、これを取り、その住民をキルへ捕え移した。彼はレツインを殺した。

なんとアハズは、最も頼ってはいけない人に頼りました。ティグラテ・ピレセル三世にこの二つの国を攻めるように依頼したのです。これはまさに、一人の男から守られるために、他の男に闘ってもらう女のように、その他の男のほうがはるかに女を凌辱するのに悪い経歴を持っていたというような状況です。いじめられ、虐げられている女が、その加害者のところに戻っていくことが多いですが、まさにアハズは自分の不安をそのような形で埋めようとしていました。

この時に、ここに書いてあるように、アラムの王は殺されます。アッシリヤが攻めてきた紀元前 732 年の間にそれを行ないます。北イスラエルも、第一次の捕囚は 733 年、この時に起こったのです。確かにアハズの政治的判断は功をなしました。けれども、このことによって南ユダはアッシリヤの属国となってしまいました。自分が頼っていた人が、かえって自分を痛めつけるのです。あるいは、自分を痛めつける人に、主なる神を拒むが故、敢えて近づいていると言ってもよいでしょう。

これは終わりの日に、人々が行うことです。自分に救いを与え、守ってくださるのは神でありキリストであるのに、その福音を拒むので、かえって自分を虐げる反キリストを受け入れます。「不法の人の到来は、サタンの働きによるのであって、あらゆる偽りの力、しるし、不思議がそれに伴い、また、滅びる人たちに対するあらゆる悪の欺きが行なわれます。なぜなら、彼らは救われるために真理への愛を受け入れなかったからです。（2テサロニケ 2:9-10）」

預言者イザヤは、ウジヤが死んだ後に、御座におられる主の幻を見て、それから取り組んだのは、アハズがアラムのレツインとイスラエルのペカによって攻められるのではないかと思ったその出来事でした。そこで、驚くべき、ダビデの子についての預言を行ないます。インマヌエル預言です。神が共におられる、つまり神が人となることの預言があります。それから、ひとりのみどり子が生まれ、子が与えられるが、彼の名は、不思議な助言者、力ある神、永遠の父、とありましたね。ダビデからの世継ぎの子が、神と等しい御子ご自身であるという預言です。これらは、この危機においてすべて与えられていました（イザヤ 7-12 章）。

2 B 靈的に 10 - 20

16:10 アハズ王がアッシリヤの王ティグラテ・ピレセルに会うためダマスコに行ったとき、ダマスコにある祭壇を見た。すると、アハズ王は、詳細な作り方のついた、祭壇の図面とその模型を、祭司ウリヤに送った。16:11 祭司ウリヤは、アハズ王がダマスコから送ったものそっくりの祭壇を築いた。祭司ウリヤは、アハズ王がダマスコから帰って来るまでに、そのようにした。16:12 王はダマスコから帰って来た。その祭壇を見て、王は祭壇に近づき、その上でいけにえをささげた。16:13 彼は全焼のいけにえと、穀物のささげ物とを焼いて煙にし、注ぎのささげ物を注ぎ、自分のための和解のいけにえの血をこの祭壇の上に振りかけた。16:14 主の前にあった青銅の祭壇は、神殿の前から、すなわち、この祭壇と主の神殿との間から持って来て、この祭壇の北側に据えた。

アハズは何と、アッシリヤが倒したダマスコの神々の祭壇をまねて、エルサレムに持ち込んでいます。歴代誌第二によると、「彼は自分を打ったダマスコの神々にいけにえをささげて言った。「アラムの王たちの神々は彼らを助けている。この神々に私もいけにえをささげよう。そうすれば私を助けてくれるだろう。」この神々が彼を、また全イスラエルをつまずかせるものとなった。（28:23）」とあります。ユダを悩ませたのだから、この神々がそれを助けたのだ、というのです。

自分を打ったのに、それをどうして拝むのでしょうか？それは、偶像は自分に語らないからです。自分に人格的に語ることをしません。私たちが、真実な交わりをするには、そこに言葉に従うという責任が伴います。その関係があつてこそ、神のかたちに造られたと言えるのです。ところが、表面的な印象だけ、軽い付き合いだけとなると、それは人間の間でも、偶像と何ら変わらない、自分に責任の間われない関係を求めていることとなります。

16:15 それから、アハズ王は祭司ウリヤに命じて言った。「朝の全焼のいけにえと夕方の穀物のささげ物、また、王の全焼のいけにえと穀物のささげ物、すべてのこの国の人々の全焼のいけにえとその穀物のささげ物、ならびにこれらに添える注ぎのささげ物を、この大祭壇の上で焼いて煙にしなさい。また全焼のいけにえの血と、他のいけにえの血はすべて、この祭壇の上に振りかけなければならない。青銅の祭壇は、私が伺いを立てるためである。」16:16 祭司ウリヤは、すべてアハズ王が命じたとおりに行なった。

アハズは、ダマスコの祭壇によって、これまで命じられていたいけにえや捧げものをするようになります。完全な混合宗教です。私たちが、イエス・キリストのご人格なしで愛や平和を語るものなら、世のものを拝ん

でいるけれども、キリストの名を取って付けただけ、という混合宗教に成り下がる可能性があります。そして、主への祭壇は、自分が伺いを立てるために用いるという、なんとも自分勝手に編み出した礼拝方法です。

そして祭司がそれをすべて行ったというのですから、祭司の中でも背教が起こっています。私たちが、世間のいうことを取り入れていけば、同じことをしていることになります。私たちは主に対して祭司です。主が命じられたことを行なうのであり、人々が要求することを行なうではありません。

16:17 アハズ王は、車輪つきの台の鏡板を切り離し、その台の上から洗盤をはずし、またその下にある青銅の牛の上から海も降ろして、それを敷石の上に置いた。16:18 彼は宮の中に造られていた安息日用のおおいのある道も、外側の王の出入口も、アッシリアの王のために主の宮から取り除いた。16:19 アハズが行なったその他の業績、それはユダの王たちの年代記の書にしるされているではないか。16:20 アハズは彼の先祖たちとともに眠り、先祖たちとともにダビデの町に葬られた。彼の子ヒゼキヤが代わって王となった。

アハズが行った行為は、異教のものを礼拝に取り入れただけでなく、進んでアッシリアに神の宮にあるものを差し出したことです。アハズは青銅のものを取って行きました。そしてなんと、王が礼拝するために用意されていたものも取り外してしまいました。徹底した背教であります。

主は、南ユダにはヒゼキヤ、そしてその孫のヨシヤを与えてくださり、その国の寿命は引き伸ばされました。けれども基本的にイスラエルと同じです。すなわち、大きな国力をもって、その後の落差が大きいということです。私たちが強いとき、調子が良い時、とくに問題を感じていないとき、これらのことが内側で進行していました。これをよい機会に、イザヤ書、またホセア書、アモス書を読まれると良いと思います。いったい、このような急激な脱落がどうして起こったのか、十分に理解できます。それは、主にのみ拠り頼むのかどうかという挑戦であり、信仰による激しい闘いなのです。